
電卓のなかの魔人

あゆみかん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

電卓のなかの魔人

【Nコード】

N0866E

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【コメディー？/短編（読了約6分）】

計算なんて苦手なくせに飲食店のバイトでレジ接客担当の女子高校生なおこ。この店は暇すぎる。しかもジェントル・マンの店長が「そろそろ『魔人』とは会えたかな？」と奇妙珍妙なことを……。

電卓のなかの魔人

(前書き)

明るい話……のはず。

見た目は普通の西洋風な喫茶店だが、中は食堂みたいにセルフ方式の飲食店。店の名前は『ジエントル・万』。

……はつきり言つて、お客はあまり入りたがらないような名前だった。

もちろん、ここで出されるサラダやおかずは怪しくはない。ちつともない。看板通り、何万円もぼったくられるわけではない。ただの店長のセンスだ。

そしてただのバイト店員のなおこには、どうすることも出来なかった。「お願いします、変えてください」とも「悪趣味です」とも何とも。

なおこは接客レジ担当。カウンターに向かつてレジの前に座り、ぼおつとして勤務時間を過ごすのだ。

この店は、暇すぎる。

なおこは髪の毛をいじったり、枝毛を数えてみたり、店の棚に置いてある雑誌を読んだり。どうやって時間をつぶそうかとそればかり考えていた。

なおこはもうすぐ18歳になる。一応、高校を卒業したら大学に進学しようとは考えているけれど、特別何がしたいとか目標とかは無かった。ノラリクラリと人生を緩やかに送っている。

せつかく見つけたバイトだった。暇そうな店の、楽そうな仕事。

レジ。

しかし、なおこは計算が苦手だった。

いや、そもそも計算の出来ない者がレジを任されているなんて

どういうことだ。一体ここの店長は何を考えているのだろうか……。

店長、登場。

座っていた なおこの前に現れた。

「そろそろ、『魔人』とは会えたかな？」

迷彩柄のバンダナに、縦書きで堂々と達筆風に『じえんとる・まん』と書かれたエプロンを着けている店長。背は低いが、鼻は高かった。日本人である。

「ハロー、ビューティフルガール？」

日本人である。

「はあ。元気ですね店長。ところで魔人って？」

「まだ会ってないみたいだね。まあ、そのうちに」

と、かなり自己完結をしバイバイと手を振って、奥の厨房に店長は戻って行った。

店長、独身男。たぶん20代後半。細身だが、骨太そうだった。

(変わった店長……まあいいや、それはどうでも)

なおこは大きなあくびをひとつ。お客が一人もいないという店内の光景に、なおこは もう すっかり慣れきっていた。

ある日のことだ。レジで またまた ぼおつとしていると。何処からか声我突然聞こえた。

「やあ。なおこ」

「!？」

気のせいにしては はっきりと聞こえた声に、なおこは周囲を見

渡した。

何も変わった所の無い店内に、なおこの座っているレジカウンタ
ー。一体何処から聞こえてきた音か？

しばらくして、また声は なおこに呼びかける。

「僕は店長代理、魔人ボウイだ」

声は どうやらカウンターの上に置いてある、8ヶタ打てる程度
の大きさのグレー色の電卓からだった。

目を丸くして電卓を手に取る なおこ。ひっくり返してみたりし
た。

電卓は、電卓である。いきなり爆発などしない。

「ボウイと呼んでくれ。ハイガール」

「なおこです」

やはり電卓から声は発せられているらしい。どんな音声仕掛けな
んだろうかと なおこは唸った。

「さあ、どうやら店は暇みたいだし。僕と計算トレーニングでもし
ようか」

突然 見た目電卓 魔人ボウイが言い出した。「は!？」

なおこは しかめっ面で手の電卓を見つめた。『ON』のボタン
を押すと『ピッ』と反応する。

「は!？ じゃないよ。僕と店長が何故 君を採用したと思う？」

なおこは「ええと……」と考えるが、わからなかったし思いつか
なかった。

「君を食べるためさ」

「いいっ!？」

「はっはっはっ」

何と笑い声まで電卓から聞こえた。

ノリが店長と似ている気がしたので、なおこは電卓にマイクでも
付いているんじゃないかと疑いが晴れなかった。しかしもうそ

れも、会話が進むにつれ どうでもよくなってくる。

「さて ふざけもホドホドに。それじゃ、5歳児の脳みそレベルからいってみようか。1たす1はいくつ？」

「バカにしてんですか？。もっとマシです私の頭っ」

「ははははは！」

また笑われた。何てキツイ性格なんだ ついていけるのかと なおこは思った。

そうやって魔人ボウイのペースにノセラレながらも、なおこは次から次へと容赦なく出される計算問題に答えていった。1たす3、7ひく5、16わる8……。

難易度は なおこの答え具合によって合わせられていっていた。

なおこは、答えるのに懸命で他を考える余裕は無い。

同時に、最初はキツイ冗談だと思っていた魔人ボウイだが、気にしなくなっていた。

「15かける3は？ いくつかな？」

「ええと……45」

「当たり前。だいぶ即答できるようになったな。エライエライ」
褒め言葉まで。なおこは感激していた。感激したわけは……。

「ん？ どうした、目、ウルウルして」

何で電卓のくせに そんなことがわかるんだろうか。何処に目がついていて、なおこが涙目なのがわかったんだろう。

魔人だからか？ そうなのか？

なおこは俯いて、両手で持たれた電卓に話し出した。

「私……今までバイト、15回も面接 落ちてきたんです」

ほお、と声がした。

「私、自信がありませんでした。自分ってバカなんだと、最初から諦めてました……」

出来ない役立たずなら練習すればいい。
何だ、当たり前のことじゃないか。何で出来なかったんだ今まで。
いや、しようと思わなかったんだろうか。何でだろう……。

「考えすぎてしまったんだねえ。本当は出来るのに。君は」
魔人ボウイは そう返事を返してきた。なおこはクス、と笑って
目尻に少し溜まった涙を拭った。

私は自分で自分に暗示という魔法をかけてしまっていたんだな。
出来るようになるかどうか結果なんてわかんないのに。私ってや
っぱりバカ。

思った なおこは涙を拭いた後、今度はしつかりと笑って見せた。
「ありがとう魔人ボウイ。私、ちょびつとだけ自信がついた」
このバイトは暇だけど、ちゃんと接客をしよう。苦手な計算を
もつと練習しよう。せつかく受かったバイトなんだから……と。
なおこの心に明るい光が差し込んだ。

「それはそれは」
魔人ボウイは抑揚も無い返事を返す。その時だった。
ガブリ。

なおこは いきなり後ろから食べられた。何かによって……そう。

店長の真の姿。
魔人ジェントル・マン。

「ご苦労。魔人ボウイ」
「イイエ。それより うまく 自信をつけさせましたよ」

「ヨシヨシ。やはり気の滅入っている肉は不味いからな。ナイス・スパイス」

「どういたしまして」

……。

とりあえず頭だけ。ムシヤムシヤムシヤ。

今夜 厨房では、レッド・パーティーが開かれる。
ぎゃああああ。

《END》

(後書き)

【あとがき】

レッド？ マッド？ デッド？ バッド？ エンド？
『日本生まれの魔人』略して日本人。

おそ松。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866e/>

電卓のなかの魔人

2009年3月24日09時04分発行